



難しい言葉。いきと粹すい

●美唄歯科医師会会員
雨田 実

粹すいのことを上方、関西では粹すいといい、めったに「いき」とは、いわないようである。この言葉は中国から渡って来たものようで、漢字のまま粹すいと読むそうです。粹すいとは色ごとに理解のある態度をいう。粹すいを利かせるという表現は、今もその意味は残っている。江戸の「いき」の場合読みかたが異なるように、上方の粹すいとは少々異なるようです。衣類などにおいても粹すいな柄とか色とかでは、随分と異なる面があったようであったが、文化の標準化がすすむにつれ、粹すいはおとろえ「いき」が上方にまでおよんだと思われる。しかしごく最近になると「いき」ということばも、死語同然に見なす若い人たちが多くなったのには、おどろかずにいられない。「いき」ということは、おぼろげに知っていても、それではさて「いき」の反対はと聞くと「不いき」ですかなどと答える人が多くいて「無粹むすい」とか「野暮やぼ」という反対語が、すっと出てこないのだ。以前の東京では「野暮用」なんてことをよくいったもので、上方ではあまり使わない言葉だそうです。どちらへお出かけ？なにちょっと野暮用で、てなふうに軽くなすのが「いき」だったわけのようでしたが、今では殆ど聞かないのは、或は使われなくなったのかも知れません。

「いき」「野暮」という一対の美意識は、たしかに力は弱くなっている。しかし、まったく死んで

しまったわけではない。死にそうだという危機意識が、一種の懐古趣味？とでもいうか、人々の間に、日本の伝統的なものに心をひかれるのかと思われる。「いき」ということばも美意識も江戸のものである。上方でいう粹すいは中国からの到来ものでやや底が浅い。それが東あづま下りして江戸の町で深化され深まって、文化、文政期（18世紀）に江戸文化の粹すいとなった。たんに江戸文化のみならず、近世日本文化ひいては、生活のなかに生きる日本文化の粹すいそのものとなった。こうして「いき」ということばと美意識が、いつとき日本を覆って、粹すいの本場である上方にまで逆流してしまったといえる。上方の粹すいと江戸の「いき」どちらがより日本のかという、上方の人でも、やはり「いき」だと思ふという人のほうが、多いそうです。「いき」というのは、日本文化を知るために、また世界文化を知るために大事な美意識だと思ふ。

「いき」の語源は、生いき、息いき、行いき、意いき気いき、の関係いきを調べなければならない。生が根本であることはいうまでもない。生きるということには二つの意味がある。第一は生理的に生きることである。息は生きるための生理的条件といえる。春の梅、秋の尾花のもつれ酒、それを小意気に呑みほす。という場合の「いき」と「息いき」の関係は単なる音韻上の偶然だけではないであろう。「いきざし」という語形はそれを証明している。「そのいきざしは、

夏の池に、くれないのはちす、初めて開けたるにやと見ゆ」という場合の「意気ざし」は「息ざしもせずかがへば」の息差からのものに相違ない。また「行」も生きることと深い関係をもっている。

そして「意気方」「心意気」の語形で「いき」は明らかに「行」と発音される。「意気方よし」とは「行きかた善し」にほかならない。また「好いた殿御へ心意気」「お七さんへの心意気」のように、心意気は「…への心意気」の構造をもって、相手へ「行く」ことを語っている。さて「息」は「意気ざし」の形で、「行」は「意気方」の形で、いずれも「生きることの第二の意味を予科している。それは精神的に生きることである「いき」の形相因（この場合は精神的に生きるための概念をつくるのに一番の素材を質料因、分り易くいえば本質のことで、その本質を磨き上げて社会的に形を与える要素のことであり共に哲学的用語）たる「意気地」と「諦め」とは、この意味の「生きる」ことに根ざしている。そうして「息」および「行」は意気の地平に高められたときに「生」の原本性に帰ったのであるという。いいかえれば「意気」が原本の意味において「生きる」ことといえる。少々分り易く解説する「いき」を定義する場合「垢抜けて（諦め）、張のある（意気地）、気品ある、べたべたしない上品な（媚態）」という。媚態だけでは十分ではなく「いき」を構成する他の二つの契機がなければならない。それが「意気地」と「諦め」である。三浦屋の遊女が「慮外」ながら揚巻で御座んす。暗がりで見ても助六さんとお前、取違えてよいものか、と啖呵を切る。そこには「異性に対して一種の反抗を示す」意識である。意気地である。媚態は「いき」のいわば材料であり、この光沢を増し角度を鋭くするのは意気地である。

もう一つの「諦め」は「野暮はもまれていきとなる」というふうには、浮世の洗練を経て、すっきりと垢抜けした心持ちとなる。背後には仏教の非現実性があるといえる。色街の「媚態」は武士の「意気地」と仏教の「諦」とにみがかれて完成して「いき」となるという。そして三つの契機があげられる。「性（生）、武士、仏教」である。プラトン「ポリテイア」に、「市民、戦士、哲学者」の三段階の見られることはよく知られている通りである。西洋哲学の三段階説を基にすれば、意気地の背後に武士道を見ても不思議ではないと思う。

話を我が国の国技の相撲道にも、また武道その他に古来から「きたなく勝つなら、きれいに負けろ」、「言わぬが花でござろう」などのことばがある、立合のきたない力士に是非見習わせたいのは故双葉山である。近代では特筆するに値する。小生は中学時代、家が両国に近かったので随分観戦した覚えがあるが、強くなり出してからの双葉山の立合で待ったをしたのを見たことは皆無だったと覚えている。勝負の神髓、極意ともいべき後先をいつ会得したのか、相手力士が立てば必ず立つというきれいな立合で69連勝した。一度も待ったをしないでの連勝故こそ日本の意気（いき）を強く感じる。

風薫る兩國橋や勝角力

双葉山にぴったりの句であるように思えてならない。

